

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 馬渡玲欧

本論文の目的は、フランクフルト学派第一世代のヘルベルト・マルクーゼの思想を生命活動、労働と遊びの一致という観点から明らかにすることにある。これまでマルクーゼの思想は、テクノロジーに対し全面的な批判を展開し、エロスの爆発的起爆力によるテクノクラシー体制の突破を目指すものと理解されてきた。それに対し本論文は、その思想の本質を「対象との戯れとしての遊びと労働の一致」に求め、テクノロジーの全面否定ではなく、その触媒機能による自由の拡大を志向する社会構想として再構成する。

序章では、先行研究が思想の根底に流れる生命活動、それを具体化する労働と遊びの一致という観点を把握しえなかった点を明らかにする。第1章では、ヘーゲルの生命思想、マルクスの労働哲学と格闘することで、すでに最初期の段階において労働と遊びの一致という視座を獲得していたことを確認する。第2章では、生命活動における遊びの契機が、生産労働や全体主義における奉仕労働の中で失われること、そしてその支配体制を市民的文化が支える現実を、文化の肯定的性格として批判的に考察する過程が検討される。第3章では、アメリカ亡命後に焦点が定められ、経済学者ヴェブレンの影響下で、文化批判がテクノロジー批判へと旋回していくプロセスが取り上げられる。第4章では、こうしたテクノロジーに対する批判が、戦争協力の一環として作成されたナチス・レポートにおいて、テクノクラシー批判、体制批判へと具体化する過程が示される。第5章では、テクノロジー自体が触媒として機能することにより、労働時間の短縮と自由な生活時間の保証が可能となり、人間労働が実験、発明といった対象との戯れ、すなわち遊びと労働の一致という性質を持ち始める可能性が示される。

審査委員会では、マルクーゼにおける技術的理性批判と、その他のフランクフルト学派第一世代の啓蒙的・道具的理性批判との関係を明らかにする必要があるのではないか、ナチス・レポートを生み出した共同研究の実態及びそこでのマルクーゼ固有の役割、人工知能が切り開く現代的科学技術に対しマルクーゼがもつ可能性と限界を示す必要があるのではないか、という指摘がなされた。しかし本論文は、(1) 初期マルクーゼにさかのぼり、これまで一面的に理解されてきたエロスの思想を生命の思想という深みで捉え返したこと、(2) そこで見出した対象との戯れ、遊びと労働の一致という視座から、マルクーゼの社会構想の生成過程を丁寧に再構成したこと、(3) これまで論じられなかったマルクーゼ思想へのヴェブレンの影響、近年発見されたナチス・レポートが果たした意義について明らかにしたこと、マルクーゼさらにはフランクフルト学派研究に対し大きな貢献を果たしたといえる。

以上の理由から、当審査委員会は本論文が博士(社会学)の学位を付与するにふさわしいと判断した。